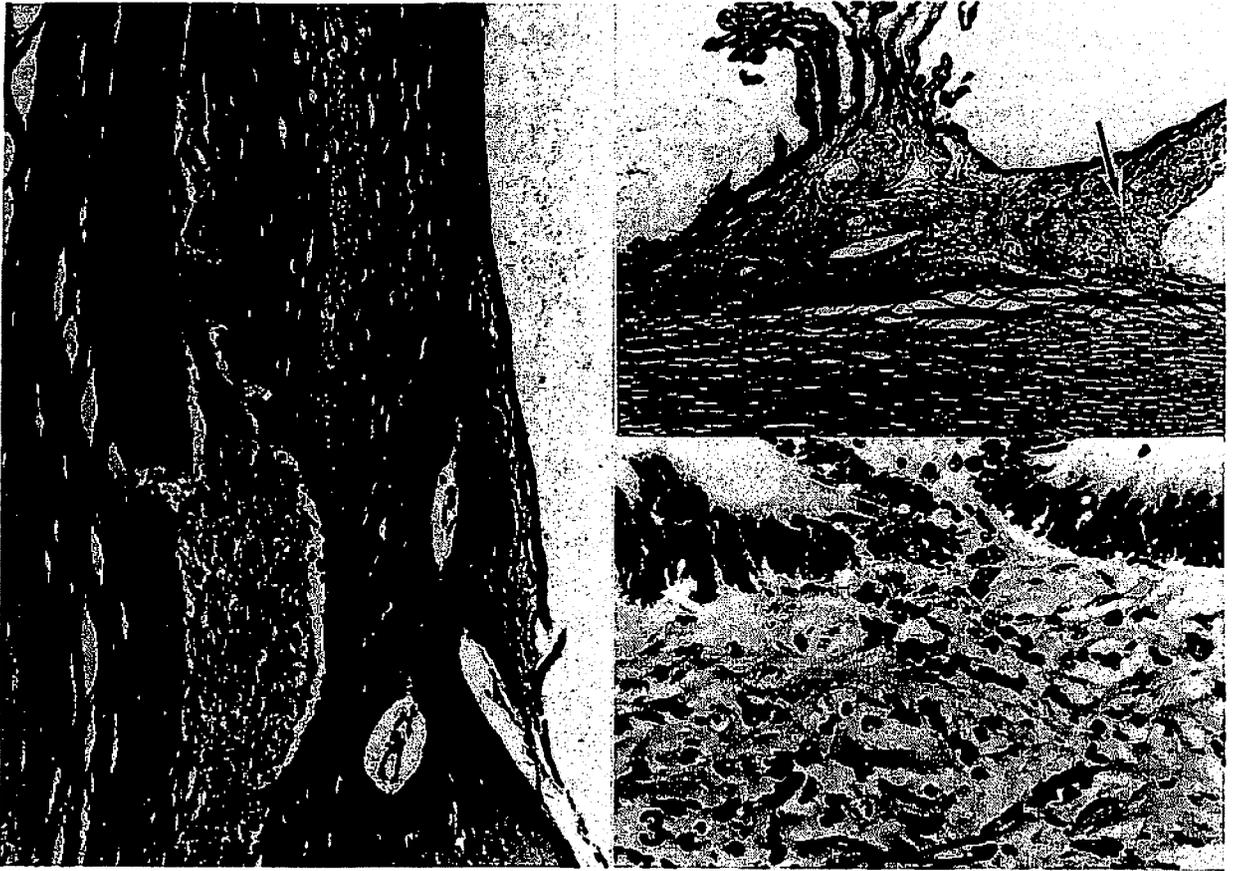


# ウシの失明両眼にみられた角膜内皮下骨化生

酪農学園大学獣医学科家畜病理学教室出題 第26回獣医病理学研修会標本No.451



**動物：**ウシ，ホルスタイン種，雌，11歳（1973年2月23日生）。飼育地，北海道中川群中川町。

**臨床：**1984年6月より歩様蹠跟となり，8月24日には，両眼角膜が白濁し，失明状態となっていた。眼球やや突出し，抗生物質の点眼を行うも改善が認められず，9月1日廃用と殺された。ホルマリン固定された両眼球のみが，検索のため送付されてきた。

**肉眼所見：**割を入れようとすると，両眼とも強膜溝に沿いリング状に角膜内側に板状の石灰沈着が見られたので，蟻酸ホルマリン液で脱灰後，割をいれた。眼球剖面においては，角膜は混濁し骨組織の存在により著しく不整となっていた。

**組織学的所見：**角膜固有層の厚さは不整で，角膜は角膜内皮下で線維性に肥厚し，骨化生が著明に生じていた。後境界板すなわちデスメ膜はところどころで離断されていた。このような線維性骨化生部には組織球および巨細胞の浸潤がみられた（写真1，HE， $\times 150$ ）。角膜固有層に血管新生が，また血管周囲性に少数の単核細胞浸潤が認められた。このように角膜の病変は内腔に局限し，それより前方の前境界板ならびに角膜上皮においては著変は認められなかった。角膜強膜境界部の角膜固有層か

ら脈絡膜にかけて，血管周囲性に軽度の形質細胞の浸潤が認められた。毛様体においては毛様体突起は萎縮し，膠原線維の軽度の増生（写真2，HE， $\times 24$ ）および形質細胞浸潤（写真3，HE， $\times 240$ ）が認められた。そして強膜静脈洞は正常に比べ狭窄していた（写真2，矢印）。網膜においては，神経細胞の脱落あるいは壊死が著明であったが，視神経ならびに視神経板には著変は認められなかった。

**考察：**本眼球では始め何らかの原因によりブドウ膜炎が生じ，そのため前眼房水の流出が阻害されたことから生じた眼圧の上昇により，慢性二次的に角膜内皮下ならびにデスメ膜に線維化，さらにそこに骨化生が起きたと考察された。同様症状は本例の同居牛，また中川町においても認められていないことから，原発のブドウ膜炎に疫学的背景は考えにくく，また両側性に発症しているとはいえ11歳になって後天的に生じたことから，遺伝的な原因も考えにくい。このような角膜内皮下の線維性骨化生病変は，ウシはもとより，ほかの動物種でも報告が見当たらない。

**組織学的診断：**慢性毛様体炎を伴った角膜内皮下骨化生。